

2024年3月17日（日）主日朝礼拝説教

『捨てられた神の子』井上隆晶牧師

詩編 88 篇 14～19 節、マタイ福音書 27 章 45～56 節

①【なぜわたしをお見捨てになったのですか】

マルコ福音書によるとイエス様が十字架につけられたのは、午前 9 時でした。昼の 12 時から全地は暗くなり、それが 3 時まで続きました。3 時にイエス様は大声で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫ばれます。これは「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という意味です。（マタイ 27：46）こう叫んでイエス様は息を引き取られました。これは詩編の中でも預言されていた祈りでした。「わたしの神よ、わたしの神よ、なぜわたしをお見捨てになるのか。なぜ、私を遠く離れ、救おうとせず、呻きも言葉も聞いてくださらないのか。」（詩篇 22：1～2）この叫びをどのように読んだらいいのでしょうか。十字架にかかることは神の意志であることをイエス様は知っておられました。それなのに「なぜ」と言われます。神に絶望した叫びでしょうか？ 午後三時という、エデンの園でアダムが善悪知識の木の実を食べる違反を犯して、神様の足音を聞いた時刻です。その時、神様は「どこにいるのか」（創世記 3：9）とアダムを呼びましたが、彼は神の顔を避けて隠れました。しかし今、キリストが暗闇の中で神に呼びかけますが、神は隠れて答えようとされません。詩編の中には「いつまで主よ、隠れておられるのですか。」（詩編 89：47）（詩編 55：2～3）とか「主よ、…なぜ御顔をわたしに隠しておられるのですか。」（詩編 88：15）という祈りが出てきます。いくら神に祈っても返事がないことを「隠れる」という表現をしているのです。つまり、ここでアダムとまったく逆のことが再現されているのです。イエス様は神の顔を尋ね、叫び続けました。ここにどんな暗闇の中でも、どんなに理不尽なことが起こったとしても信仰を失わない人間を見ることができます。こうしてイエス様はアダムの不従順を癒されます。「神の名を呼ぶ！」これを信仰というのです。「わたしは神を呼ぶ。主はわたしを救ってくださる。夕べも朝も、そして昼も、わたしは悩んで呻く。神はわたしの声を聞いてくださる。」（詩編 55：17～18）「神を呼べば、敵は必ず退き、神はわたしの味方だとわたしは悟るでしょう。」（詩編 56：10）

その人に信仰があるかどうかは、苦しい時に誰に頼り、誰の名を呼ぶかで分かります。多くの方は困った時「神に頼ったって無駄だ。神は答えてくれない！」と言って祈るのを辞め、自分を助けてくれそうな人を捜しに出かけます。しかし人に頼る人は、相手が自分の思うような答えをくれないと「誰々は何もしてくれない！」と言って人のせいにし、人を恨みます。人を当てにするから文句が出るのです。「人間に頼るのをやめよ。鼻で息をしているだけの者に。」（イザヤ 2：22）という言葉があります。一方信者は「神を呼ぶ！」のです。そして神に頼る人は、人を恨みません。これでその人に信仰があるかどうかははっきりします。難しい

ことなんか分からなくてもいいのです。まず座って神の名を呼びましょう。キリストの名を呼びましょう。そこから始めて下さい。

②【神中心の信仰に変えられてゆく】

ヘブライ 5：7には「キリストは肉において生きておられた時、激しい叫び声をあげ、涙を流しながら、御自分を死から救う力のある方に、祈りと願いをささげ、その畏れ敬う態度のゆえに聞き入れられました。」と書かれています。これはゲッセマネの祈りのことを指しているのですが、主は最後に「しかし、私の願いではなく、御心のままに行ってください。」(ルカ 22：42)と祈りました。

●榎本保郎牧師はこう書いています。「舟が沈みかけているとき、私たちは『神様助けて下さい』と祈る。でも、神の御心を問わず、ただ生かしてくれというのは、悲鳴であって祈りではない。その悲鳴が祈りになるためには、『しかし、私の思いではなく、御心をなしてください』という祈りで結ばなければならない。…私たちの信仰生活の中で、キリストがわからなくなる時がある。神の沈黙である。…でもその時こそ、自分中心の信仰が神中心の信仰になっていくのを気づかされるのである。…神からがくっと取られる。そういう苦しみを通して私たちは従順を学んでゆくのである。」

そういう意味で、イエス様は神の前にある一人の人間として「祈りの見本」を示して下さったのです。

③【陰府（死者の国）にいるすべての人間を捜すために死ぬ】

それだけでなく「わが神、わが神、なぜわたしをお見捨てになったのですか」という叫びには、神様の深い計画を含んでいます。イエス様は父なる神様から捨てられました。「あなたはわたしを塵と死の中に打ち捨てられる。」(詩編 22：16)とあるからです。それは死ぬという経験です。死とは何でしょう。死は命の源である神から引き離され、神から最も遠く離れた場所に連れていかれる事です。死んだ人たちは皆、神様から最も遠い場所にいるのです。決して死ぬことのない神が、人間性において死ぬ経験をされたのは、死んだ人たちの所へ下って行くためでした。人間の肉を取らなければ神は死ぬことが出来ません。だから言である神は肉となったのです。キリストは自ら死ぬ、つまり神に捨てられることをもって、神から遠く離れた死者の世界、陰府の世界にいる人たちの所に行かれたのです。

●昔、堺雅人さんと高畑充希さんが主演の「鎌倉ものがたり」という映画を見ました。何かの手違いで陰府に行ってしまった妻を捜し求めて、夫である堺さんが陰府にまで電車に乗ってやってくるのです。そして妻を見つけて、魔物と戦い、また現世に妻を連れ帰るという物語です。聖土曜日のキリストの陰府降りを思い出します。そこにはこんな表現が出てきます。「支配者よ、あなたはアダムを救うために地に降り、地の上では彼を見つけられずに、彼を尋ねて地獄にまで降られました。」古代教会の聖土曜日の説教ではこのように書かれています。

「主は勝利をもたらす十字架という武器をもって、彼らのもとに入って来られました。…そしてアダムの手を取って起こしながら言われます。…あなたに命じる。眠りについている者よ、起きよ。私は、あなたが陰府の国にいつまでも捕らわれの身でいるためにあなたを造ったのではない。死者の中から起き上がれ。私は死者のいのちである。私の手で造られた者よ、起きよ。私に似せて造られた私の似姿よ、起きよ。立て。ここから出て行こう。あなたは私のうちにいる。私たちは一体で分かれる事のない身体なのだ。…立て。ここから出て行こう。敵はあなたを楽園から連れ出した。しかし、私はあなたをもはや楽園にではなく天の玉座に着ける。私は命のしるしである木からあなたを遠ざけたが、見よ、今や命そのものである私とあなたと一つに結ばれている。」

神は私たちを捜し求めて、死の世界まで来て下さいました。だから最早、誰も「私は神に見捨てられた」ということはできません。実際は人間が神を見捨てたのであって、神は人間を一度も見捨てたことはないからです。聖書では神の名は「インマヌエル」と言い、神はいつも私たちと共におられると書かれているからです。

「人は倒れても、打ち捨てられるのではない。主がその手をとらえていてくださる。」(詩編 37 : 24) のです。神はあなたを捜しに来てくださったのです。人間は自分の力では、命に帰ることは出来ません。捜しに来てくれた方の手にしっかり抱かれて、命に帰るのです。捜してくれる方がいる！迎えに来てくれる方がいる！ということは何という幸せでしょうか。それを深く感謝したいと思います。